

---

# 魔神異世界奮闘日記

神神 神様@monokuro

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔神異世界奮闘日記

### 【Nコード】

N4142Y

### 【作者名】

神神 神様@monokuro

### 【あらすじ】

死んで魔神になった男は、神の事情により原作ブレイクしまくる物語です

リメイクしました

注、主人公は最強無敵チートです。駄文です（中学生以下）

## プロローグ（前書き）

どうも monokuro です。リメイクを行いました。  
リメイクといってもグダグダなのは変わりませんが……。  
どうぞ生暖かい目で見守っていただきます。

## プロローグ

目が覚めるとそこは白い世界だった。

白いキャンパスに白い絵の具で描いたような、そんな場所に俺は立っていた。そして、どこまでも続く白い世界が俺の目の前に存在している。

しかし俺は確か、いつも通り部屋で寝ていたはずだ。だから 此処に来るはずが無いのだ。

「ふおおおおおお、それは御主が此処に来る必要があったからじゃ」

突然老人の声が俺の背後から響いた。だが俺は驚くことは無い。俺はこいつと何度か会っている。

俺は、ゆっくりと後ろを向きながら声の主を見た。白い髪に髭に少し皺がある顔。そして一枚布でできた服を着ている仙人の様な老人がそこにはいた。そして俺は老人に言う。

「よう、久しぶりだな神様」

そう、人間たちが崇める存在、神様だ。

「ふおおおお、別に神と言う名ではないがのう」

神は笑いながらそう言った。確かにこいつは神という名ではない、神というのは種族名だ。だが、こいつに本名はあるのかと言うと、あるわけが無い。それはそうだ生まれた時、こいつは一人だったのだ。名前を付けてくれる者など居なかったなのだ。

しかし、俺は疑問があった。それを聞くために俺は神に問う。

「おい、神様。前までは青年だったのにいきなり老けたのか？」

そう、前まで此処に来たとき出会っていた神は、青年の姿だった

のだ。今と同じ白い髪に一枚布の服を着た。超イケメンだったはずだ。

「うむ、所謂イメチェンじゃ」

「神様がイメチェンって、どうなんだ？それ」

「なに、ワシには特に決まった姿などないからのう。たまに変えてみたくなるのじゃよ」

まあ、確かに姿を変えられるのなら偶に変えてみたい気持ちは分かるがな。しかし、いきなり変えられると、一瞬誰か分からなくなるからあまり変えないで欲しいな。

そう笑いながら話していると神は、真剣な趣になり。俺と向き合った

「それにしても御主、まず聞くべきことがあるのではないかのう？」

「ん？何のことだ」

そう答えると神は呆れ顔になった。顔に手を当てヤレヤレといった感じだ。しかし実際に何のことだか分からない。

「御主は今まで此処に来るのは死に掛けたときのみだったじゃろう

に、なのになぜ家で寝ていただけなのに此処に来たのか疑問に思わ  
んのか？」

そう言われやっとな俺は納得した。

「ああ、なるほどそういうことか。すまん、何回も此処に来ていた  
から近所の知り合いの家に来る感覚で忘れていた」

昔、近所のおばさんの家によく行ったりしていたからな。そんな  
感じで来ていたし今まで。

「この神の間にご近所感覚で来るとは…、恐ろしいのう。此処を目  
指す者ですら此処にはたどり着けんのじゃよ？普通はのう。という  
より御主が初めてじゃったしこの此処に辿り着いた人間は」

そうだったのか。初めて知ったぞそんなこと。

「で、何で俺は此処に居るんだ？」

「お、おおう、そうじゃったな。やっと本題に入れるのう。まあそ  
うじゃのう、単刀直入にぶっちゃけてしまつとな、御主死んでしま  
ったのじゃよ」

「へえ〜」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「い、いや、御主もう少し驚いたりパニックになったりすると  
じゃぞ普通は!?!」

そう言い、神自身が驚きパニックになっている。なかなか面白い。

「何回もこんなところに来た所為で、なんか感覚が麻痺したみたい  
だな」

「そんな普通に状況観察しないでくれんかのう」

それにしても何か引つ掛かる。何がだ？俺は死んだ(らしい)が、  
だったら何故此処にいる？輪廻の輪の中に入るはずじゃないのか？

「なあ、神様よ。俺は死んだんだよな？だったらなんで輪廻の輪の  
中に入らないんだ？もしかして輪廻自体無いのか？」

「輪廻の輪はあるぞい。まあ簡単に言うと御主はそこから弾かれた  
のじゃ」

さすがの俺も輪廻の輪から弾かれたと聞き、真剣な顔になった。



「なぜだ？なぜ俺は弾かれたんだ？」

「ふむ、御主の体をよく見てみるのじゃ」

そう言われ俺は俺自身の体を見てみる手、胸、腹、足と、普通にあってどこも変わったところなど無い。

すると、いつの間にかどこから取り出したのか、神は、自分の身長より長い木でできた杖を取り出した。神というより仙人だなありや。

そして神がそれを軽く振ると、俺の体に変化が起きた。

俺の体が黒くなり禍々しい、まるで悪魔や魔王などの化け物のような体になった。シルエツトは人間と同じだが、明らかに人間ではない。人間とは言えない存在になった。

「それが御主の本来の姿じゃ。最も神に近き者。【魔神】じゃ」

本来の姿ということは、神が俺の姿を変えたのではなく、俺の本来の姿に戻したのか。

それにしても【魔神】か。

「ほう、なるほど。俺が人間ではなかったから輪廻の輪の中に入れ

なかったのか。しかし俺は死んだんだろ？ だったら消滅するんじゃないのか？」

「やはり、落ち着いておるのじゃな、不思議なやつじゃのう。疑問に思うのもあたりまえじゃの。まあ、簡単に説明すると天使や悪魔や神などは基本的に不滅じゃ、じゃから簡単には消滅しないのじゃ。死んだというのは、御主は人間の体に入っていたのじゃがその体が耐え切れなくなり壊れてしまった。ということじゃ」

なるほど、なんとなくだが理解はした。

「しかし、神様よ俺はこれからどうすればいいんだ？ 俺は不滅なのだろ？ つまりそれは分かりやすく言うと不老不死ということだろ。俺は死ねないなら何をして生きていけばいい？」

俺がそう聞くと神様は、あごに手を当て少し考える素振りを見せると、考えが纏まったのか何度かうなずくと口を開いた。

「ならば、ワシの下で働くと言うのはどうかのう。仕事なら沢山あるからのう、それに、御主とは長い付き合いになるだけじゃろうしの」

「ああ、いいぜ。何もすることがないしな」

俺がそう言うと、神は嬉しそうに笑った。

「ありがとうじゃ、御主はかなりの力があるからう。正直ワシの話を無視してどこかフラフラされては困るとこじゃった」

「力があるってどれくらい？」

とりあえずこれは聞いておかなければならない。俺がどのぐらい危険なのか把握していないとな。

「うむ？そつじゃなめ、ぶっちゃけワシの少し下じゃ」



「御主は家族も当然じゃ。それに初めてワシの力も無しに、自然に生まれた不滅な存在じゃからのう。ワシの創った神や天使や悪魔たちとは違う。だからのう、家族の様な呼び方をしてくれはせんか」

なるほど、俺ももう人間じゃないし。家族もいないから別にいいか。元人間なだけあってけっこう家族というのが恋しいしな。

「いいぜ、でもなんて呼べばいいんだ？あんたは姿を色々変えられるんだろ？一定の呼び名が無いような気がするんだが。俺よりはるかに歳をとっているからじいちゃんか？」

「うむ、じいちゃんでよい。しかし、この姿も変えるかの。まあ、姿が変わってもじいちゃんてよいからのう。そしたら、御主の呼び名は孫かのう？」

「ははっ、それでいいぜじいちゃん」

「うむ、我が孫よ」

タララララン！

【今ここに、神と魔神の家族が誕生した！！】

今なんか変なファンファーレ？みたいなのが流れて、何かが表示

された様な気が…。

さて、本題に戻るか。

「で、じいちゃん仕事ってのは何なんだ？」

「おお、そうじゃったのう。御主にやってもらいたいの、【世界を変える】と、いつものじゃ」

……………  
ん？

俺は混乱した。世界を変える？そんな馬鹿な！ああ、いや。この馬鹿なは、中二かよ！とかの馬鹿ではなくて、魔神になりたての俺にそんなことをさせていいのか？という意味だ。しかし、俺にそんなことをさせるって、確かに俺はじいちゃんより少しだけ力が劣っているだけだし。やろうと思えばできるだろうよ？でもさすがにいきなり世界を変えろって、俺の住んでいたに何か起こるのか？てか、そんな大役やりたくないんだけど！？

「ああ、何だか混乱したようじゃの。御主が変わるのは御主が居た世界ではないぞ？御主が変わる世界は、マンガやゲームといった世界じゃ」

は？俺にそんなところに行けと！？俺に二次元にいけと！？潰れると！？

「御主の世界でのマンガやゲームといったものは、すべて別世界で起きた出来事なのじゃよ。つまりは、別世界で起きた出来事が何らかの理由で御主の居た世界の作家などに影響しマンガやゲームが出来る上がるのじゃ。そしてそこで【世界を変える】もとい【原作ブレイク】をやってもらいたいのじゃ」

なるほど、そういう意味か。まさか、そんなマンガな世界が本当にあるとわな。てか、じいちゃんが【原作ブレイク】っていうとなぜか違和感が。

「まあ、別にすぐ行けとはいわぬ。御主は魔神の力はまだ使えんじやろ？じゃから少しばかり此処で力の使い方を学んでから行くとい

い」  
ああ、そういえば俺って魔神になったんだよな。これの力ってどんなんだ？

「ああ、そうじゃ。御主にこれをやるつ」

そう言ってじいちゃんは、どこからか黒いスマートフォンとフレームに装飾が施された丸型レンズのサングラスを取りだした。  
俺はサングラスの方に見覚えがあった。ずいぶん昔だが。

「ん？そのサングラスって、昔俺が作った奴にそっくりな様な気が…」

「ふおふおふおふお、そっくりでは無く、正真正銘御主が作ったものじゃよ。人間界から持ってきたのじゃ」

そう言いながらじいちゃんは俺にそれらを渡した。俺は早速サングラスを掛けようとしたが、今の俺は魔神だ。2本の腕に2本の足があっても人では無い禍々しい存在。つまり、今の俺が掛けてもかなりシュールな光景が出来上がってしまうのだ。

「でも、何なんだ？これは。サングラスは俺のお気に入りだからいいけど、なんでスマフォ？魔神がスマフォってかなりシュールだぞ？」

かなりっていつか、とてつもなくシュールだ。最近の神様は、こういうものを普通に持っていたりするんだろうか？パソコンを使いながら仕事をする天使たちが眼に浮かんだがとても笑える。にしても何なんだこれは、俺がスマフォを持つ必要があるのか？

「ふむ、御主は魔法少女リリカルなのはというアニメを知っておるか？」

いきなり何を言い出すんだ？じいちゃん



「大まかな内容とメインキャラクターの名前ぐらいは、分かるが？」

「ふむ、じゃったら。デバイスは知っておるかの？」

「魔法使いの杖みたいな奴か？」

「まあ、大体そんな感じで良い。ようはそのスマートフォンはデバイスじゃ」

神がそう言うと、スマホが起動し、画面に光の渦が移りだした。

「初めまして、我がマスター。私の名前はレイディヴァリアと言います。これからマスターをサポートし、行動を共にするデバイスです。これからよろしくお願いします」

喋った！？いや、じいちゃんが創ったんだからこれぐらいは当たり前か。にしても行動を共にする仲間ってことか。まあさすがに一人で世界を渡って【原作ブレイク】するのは寂しかったからな。

「ああ、よろしくなレイ」

「はい、マスター」

なんか、いい子だな。

「レイディヴァリアは、下級天使並みの力はあるぞい。それに人型にもなるしのう」

……！？人型だと？なんかそれはそれで一緒に居ずらいのだから。まあいいか。

「で、これから世界を渡って【原作ブレイク】をする前に、力の使い方や制御を覚えるわけなんだが……じいちゃんが教えてくれるのか？」

てか、魔神の力っていったいどんなんだ？

「ワシは、おしえられん。仕事が忙しくてのう。まあ、その為のレイディヴァリア何じゃが」

じいちゃんが教えてくれるんじゃないのか。にしてもレイは下級天使程度の実力しかないのだから？だったら俺に教えることなんてできないうんじゃ……。それに魔神と天使とじゃ、ちがうだろうし。

俺がうんうん考えているとじいちゃんは笑い。

「なあに、心配せんでいいレイディヴァリアは御主のサポートをさ

せるためにワシが創ったのじゃからな。力も【下級天使並みの力】であつて天使では無いからのう。力の制御の教え方もかなり分かりやすいはずじゃ」

「はい、全力を尽くして御教えしますマスター」

「おう、分かった。よろしく頼むぜレイ」

「天使や悪魔や神達の邪魔をしなければどこでも好きに修行すると良い」

此処からは、修行風景をお送りいたしますbyleyディヴァリア  
(マスター観察日誌より)

「さて、修行ねえ。力つてことは、とりあえず某野菜人みたく雄叫びをあげればなんかなるかな？」

「確かに、それで力を引き出すことは可能なはずです。それで力がどういふ物かを認識してください。」

「了解！」

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！……

「なんか揺れ始めた！？」

「物理的、空間的に大規模な振動を確認。下手をしますと世界が崩壊しますね」

「とんでもない事態に！？やばいよな！？それ！………っっていうのまにか止まってる」

「なにやっ тонн じゃ！？御主ら！」

「じ、じいちゃん！いや、力がどんなものかと認識しようかと思っ  
て、思いつきり気合いをいれて雄叫びを上げたら………ねえ？」

「その所為で危なく、天界と魔界が崩壊寸前じゃったわい！……」

「い、ごめんじいちゃん」

「（予想以上に力があふれているようですね。これはかなり手を焼  
きます）」

「ぬぬぬぬ、結構難しいな力の使い方って…」

「はい、ですが、マスター自身からかなり力があふれているので、ぐにでも使えると思いますけど……」

「ガアアアアアアアアアツ!!」

「なんか来た!?三つ首の犬!?あれって……」

「ケルベロスですね。かなり凶暴ですよ?」

「いや!何冷静にそんなこと言ってるの!?ぎゃあああああああ  
あ!!俺死んじゃう!!危険危険!!」

「大丈夫です。私たちは基本不滅ですので死にませんし、マスターの力なら撃退も可能です」

「ガアアアアアアアアアツ!!」

「まだ、力の使い方制御もできていないっていうのにそんなことをいうなあああああああ!!こっとなったら自棄だ!!」

「うおおおおおおおおおおおおりゃああああああああ  
ああああああ!!」

「唯の!右!スウウウト、レエエエエエエトツ!!」

「グシャツ!! ケルベロスがミンチ状になった音」

「……………？」

「無茶苦茶ですね。力など使わなくとも最強じゃないですか。この身体能力だけで世界を変えられるのではないですか？」

「…俺もそう思った」

「やった！力を意のままに使うことが出来た~~~~っ！！」

「おめでとございます。身体能力だけでも十分に星を破壊できるのに、その上、神の力まで使うとなると、本当に最強ですね」

「……………ああ、もうなんか敵がじいちゃんぐらいしかいないな」

こうして、俺はレイから力の使い方や制御の仕方などを約1ヶ月程学んだ。

使えるようになった力は

魔眼（何でもあり）

ありとあらゆる魔眼が使える

異能力（何でもあり）

ありとあらゆる魔法、陰陽術、超能力などが使える

創造（何でもあり）

様々な武器や道具や物を創りだす事が出来る

ぐらいだ。

え？何？ありえない？はは、俺も最初はそう思っていたよ。ただできてしまったんだからしょうがないだろ？あっはっはっはっはっは。

それから、俺に元々あった能力（修行せずとも使えた能力）は

吸収（魔力、気、霊力、生命力など）

この、吸収は、人間が空気を吸うのと同じらしい（じいちゃんや神や天使、悪魔などはそういうことはしない。魔神だけらしい）。

無限の書物（様々な知識と最高の演算能力）

これは、じいちゃんなども持っている基本的な能力らしい。

と、まあ、元々の能力だけでも結構いけたりするんだよな。それ以後から覚えた能力より使いやすいし。

ついでに今、俺は創造によって創った封印具の手枷と足枷を付けている。手枷と足枷は左右が鎖によってつながっている物だ。ついでにその鎖は俺のイメージで伸縮自在に変化し、さらに物理的、空間的に見ることも触ることもできなくなり人間界での生活に支障が

出ないようになってる。

ついでにこの枷。片方（鎖無し）だけでサタンの力を完全に抑えることが出来るらしい。

創造で武器も一応創っておいた。創った武器は俺の体の中に入れることが出来るので俺の体の中に収納した。何を創ったかは教えな  
いぜ。まあ、四次元ポケットみたいなのが有るのだが。これにはネ  
タで創った武器や回復系の道具などを収納している。ついでに四次  
元ポケットみたいなものは俺の任意で空間に出す事が出来るが、人  
間の姿になったら服を着るだろうしズボンのポケットに定着させる  
つもりだ。

それから、修行していて気づいたが、腹が減らない。

まあ、これは不滅だし、当たり前だな。しかし元人間のためか、  
腹は減らないが、味を楽しみたい気持ちがある。

これって食い意地がはっているって言うのか？腹は減らんが口が  
寂しい！！

まあ、そんな子といっても此処は人間界じゃないので食べ物など  
無いからもう諦めた。しかし、世界を渡ったら、うまいものを食べ  
るといふ目標ができた。（レイに聞いたら俺は食ようと思えばいく  
らでも食えるらしい）

渡った世界にうまいものがあつたらいいな（なんか、食いしん  
坊になったような気が）

と、言うわけで俺は、俺が魔神になった場所。神の間に来ている。

「というわけで、修行は終了したぜじいちゃん」



俺は、じいちゃんにブイサインを送りながら話す。

「ふむ、確かに力の制御はできるようになったようじゃのう」

「はい、間違つて世界を破壊してしまわない程度に制御できるようにはなりました」

レイよ、それはひどくないか？確かに最初の方は何度も天界や魔界を崩壊寸前まで追い込んだりしていたけどさあ

「うむ、それだけ制御できておれば問題は無い。さっそく世界を変えろという仕事を、【原作ブレイカー】をやって貰おうかの」

「おう、分かったぜ世界の渡り方は大体覚えたしなさっそく行つてくるぜ」

これが、俺の魔神になつてからののはじめての仕事だ。

「……………その姿で行くのか？」

「あ

そういえば俺、魔神の姿のままじゃん。こんなんで世界渡っていきなり人がいる町とかに出たら完璧に化け物扱いされるなあ。

と、言う訳で、人間化しました。とりあえず適当に青年の姿になりたいと念じたのだが、成功したようだ。

今の俺の姿は、身長175cm前後で、赤み掛った長い黒髪を首元で束ね、左が赤で右が金のオツドアイで切れ長の目、整った顔立ち、体格も余計な脂肪は無く、かといって筋肉が異常に在るわけでもない。まあ、簡単に言ってイケメンだ。服装は白いYシャツにジーンズといったラフな格好。もちろんジーンズのポケットには四次元ポケットを定着済み。

何故だ？何故人間になろうとしただけでこんなにもイケメンになるんだ？まあ、でも俺だからかどうか分からないが、イケメンなのになぜか2枚目になりきれしていないというか、どこかのネジが外れている感じた。

……………これが俗に言う残念なイケメンか。

「ずいぶんとイケメンに変身したのう、残念なイケメンだがの」

じいちゃんからも言われた！？そんなに残念なイケメンかよ。

「私は、マスターがどんな姿であろうと好きですよ」

「レイー、お前は良い奴だよお」

「まあ、御主が人間の男になりたいとだけ望んでなったのならばそれがデフォルトという訳じゃな」

まじかよこれがデフォ？

「さて、ついでにワシも姿を変えるかのう」

は？なじえ？

じいちゃんはそう言うと光に包まれた。光が治まった時にじいちゃん居た場所には白髪の老人は居なく、白髪交じりの髪をオールバックにした、スーツが似合う、かなり渋めのおっさんだった。

「……じいちゃん。なんでその姿？てか、じいちゃんと呼んでいいのか？」

「はっはっはっは、老人の姿が飽きただけだ。ついでにじいちゃんと呼んで問題は無い、安心しろ」

いや、安心しろって……。まあ、いいか。

準備はもうできたし行くとするか。っと、その前にじいちゃんに頼んでみるか。

「なあ、じいちゃん頼みごとがあるんだぞ」「いいぞ」「ってはやいな  
おい」

「断る理由は無いしな、大方お前の名前だろ？」

……さすがじいちゃん、わかってるじゃねえか。

「ああ、人間だった頃の名前は捨てる。だから新しい名前をくれ」

俺がそう言うと、じいちゃんは腕を組み少し考えてから答えた。

「神シンでどうだ？」

「神、ねえ。理由は「俺が」神かみ”でお前が魔”神じん”だから”…だと  
思った」

…神って表記だと読みづらいからカナ文字でシンって表記しよう。  
…っは！??どこからか電波が。

「にしても、なんで名前なんか？」

「世界を渡ったら色々名前や身分を変えるが…やっぱり本当の名前  
が有った方がいいからな。あつ、ついでに偽名もくれ」

ああ、わかったよ。と、じいちゃんはいいながら俺の額に手を当

て名前の情報をくれた。

「じゃあ行って来いシン。たまにはこっちにも顔を出せよ。ああ、それから俺はこの姿から変えないから心配するなよ」

「了解、行ってきますじいちゃん」

そう挨拶をし、俺は世界を渡った。

### 最高創造神 じいちゃん

「行ったか」

俺は、だれもいなくなった神の間でひとりそうつぶやいた。

「それにしてもじいちゃんって呼ばれるのが、こんなにも良いものなんてな」

俺は、生まれた時から一人だった。だから俺は家族と言う物は知らない。天使や悪魔は俺が創ったのだが、家族とは言えなかった。だが、今の俺は家族がいる。俺をじいちゃんと呼ぶ奴が。それだ

けでいい。それだけで嬉しい。

「それにしても、あいつは俺と家族という意味はわかっているのかねえ？」

まあ、分かっていないだろうな。しかし、そのうちわかるだろうな。俺の家族だし。

俺は、懐から煙草を出し、俺の力で火をつけて、吸った。見よう見まねだし吸う必要性なんか一切ないのだがな。雰囲気ってものだ。

「頑張れよシン。強くなって此処に戻ってこい。そうすれば俺の家族という意味がわかる」

誰もいない白い空間に煙草の白い煙は溶けるように消えていった。

## プロローグ（後書き）

monokuro「さて、あとがきコーナーの時間だよ」

シン「わーい、って、作者！」

mo「?なんだ」

シン「相変わらずのgggdだな、ついでに駄文」

mo「グハツ!!少しだけは上達したんじゃないかな?」

シン「まあ、花粉から緑虫ぐらいか?」

mo「…なんだろう。喜ぶべきなのか悲しむべきなのか良く分からない」

シン「どうでもいってことじゃね?」

mo「ひどい!」

レイディヴァリア「ひどいのはこっちですよ」

シン「ん?レイいたのか」

レイ「最初からいましたよ。それにしても作者さん」

mo「な、何でしょうが」

レイ「私の出番。かなり少なくないですか？最後のほうなんて殆んどしゃべっていませんし」

mo「あゝ、あれは、家族水入らずでお話をつけてことで主に二人だけで話していたんだよ」

レイ「…一応そついうことにはしておきましょう」

mo「ありがとう」

シン「で、俺はこれからどの世界に行くんだ？またリリカルなのはか？」

mo「んゝ、まだ決まっ……とりあえずあの世界にほっぽるつもりではいる」

レイ「あの世界とは？」

mo「それは、次話のおたのしみってな」

シン「すごく不安なんだが……」

レイ「私もです、マスター」

mo「大丈夫だって………たぶん」

レイ・シン「………え？」



第一話 ……ん？原作キャラは？（前書き）

シン「って、普通にリリカルなのはじゃねえかよ！..」

モ「ははははは、ネタが思いつかなくてな」

シン「はあ、これだから駄作者は」

モ「ひでえな、まあいいや、とりあえず前書きはあまり長くしたくないから始めるぜ」

シン「ああ、分かった」

モ「お・シ・ン」「ど・じ・ぞ」「ご覧ください」

第一話 ……ん？原作キャラは？

シン

俺は今、山の中にいる。何故かって？世界を渡ったって、証拠だ  
る？

俺は、サングラスをポケットから出して掛けた。

「さてさて、いったい此処は何所だ？……いや、何の物語だ？」

「此処は、【魔法少女リリカルなのは】の世界です。今は…原作前  
でしょっね」

ふむ、リリなのの世界か。戦闘は回避できなさそうだな。

「レイ。この世界の情報をできるだけ簡潔に教えてくれ」

「？物語の展開などですか？」

「んにゃ、それが分かったら何も面白くないからな、それはしない。ただこの世界。この物語の常識程度の情報をくれ。大まかな内容しか覚えていないしな。後は自分で調べる」

「了解しました。マスター」

〜デバイス説明中〜

レイに教えてもらったが、この世界には次元世界なるものが存在  
していて。それを管理している【管理局】があり。そこは魔法を駆

使している組織であること。

この次元世界は俺が元居た世界【地球】とほぼ変わらない世界であり。管理局の管理外の世界であること。

ざっと教えてもらったが、地球ねえ。山の向こうを数ある【魔眼】の中の一つ【千里眼】で見ると町が在り、確かに俺が人間だったところに居た日本と変わりが無い。

今は、原作前ということではつきり言って、世界を変える要素があんまり無いんだよな。原作が始まってイベントが発生してからそこに介入する予定だからな。

「とりあえず今は、住む所だな」

「マスター。マスターは不滅ですので、睡眠を取る必要はありませんし食事も必要ないはずです。ですから住む場所は必要ないかと思えます」

「ん〜。それもそうなんだけど、原作キャラとか管理局と仲良くなったら調べ上げられそうじゃん？だから形だけの住処みたいな？原作開始までそこでグータラしてるし？」

「…確かに一理あります。分かりました」

「でもどうすっかな〜、俺此処じゃ戸籍ないし。土地買えないし、その前に金も無いし」

「マスターの力と私の力を使えば簡単です。私がこの国のコンピュータにハッキングして戸籍をつくり、マスターがお金を稼いで土地

を買い、創造の能力で家を建てればいいのですから」

「いや、俺が金を稼ぐってそんな簡単にいくわけ無いだろ？すぐに大金が入るわけでもないし。てか土地って一戸建て前提かよ！？」

「ただいまハッキングが完了しました。「もう終わったのかよ！？ハッキング早すぎ！？下級天使級の力すげー」正確にはハッキングとは違うのですがこういうたほう分かりやすいので」

「でも、金を稼ぐのはどうしたらいい？」

「マスターには【一攫千金】という能力があります。この能力は簡単に言うと、欲しいときに欲しいだけお金が入ってくる様な能力ですな」

え？何その能力。怖いんですけど。

それにしても欲しいだけねえ。だったら今は二億円ぐらい欲しいかな？

そう思ったとき俺のもとに一枚の紙切れが風で飛ばされてきた。

「ん？何だこれ？宝くじ？…っは！まさか！？」

「はい、マスターの想像道理です。その宝くじは二億円の当たりくじです」

この能力やばすぎる！？…

「とりあえず銀行に行くか。今は金が欲しいしな」

「そうですね。行きましようマスター」

そうして俺は、銀行に行き。十億円を現金で貰った。（銀行に行く途中にも当たりの宝くじを拾った）

とりあえず。山の近く、もとい二つ程山を買った。山の広さは、東京ドーム二つは軽いな。

で、山を買った俺は、すぐさま創造の能力を使い家を建てた。

家ははつきり言つて、武家屋敷だ。かなり広い…な。五十人程が働いていそうな程広い。加減間違えたかな？まあ、いいや。

この世界に来て1週間足らずで、家が建った。

え？もっと早く作れたんじゃないのか？無茶言つなよ。宝くじつて結構時間かかるんだぜ、土地買うのもさ。能力少し使つて少し早めだけだな。ついでに家を建てるのに所要した時間は3・954秒だ。

「随分とすごい豪邸になりましたね」

「ああ、別にどうでもいいけどな。とりあえず寝れりゃ俺には関係ない」

しかし、俺としてはベットに寝たいんだよな。別館として洋館を建てるか。

そう思い俺は、武家屋敷の隣にこれまた巨大な洋館が出来上がった。…なんだ？俺が家を建てると豪邸になるのがデフォルトなのか？そんな事を考えながら俺は必要な家具などの製作に当たった。

家具などもなぜか高級品の様な家具しかできなかった。何故だ！？何故高級そうなのしかできないんだ！？ランダムに家具を創造して、家に配置したら何故かこれはいい壺だ的な物とか、掛け軸や生花（枯れない）などが置かれ、洋館のほうには何故か俺の肖像画（巨大）が壁に掛かっていたり、とんでもない物になった。

それから洋館と武家屋敷は通路で繋がっている。まあ、殆んど俺は洋館にいるだろうがな。和は和で良いのだが、洋館に地下室を造ってしまったので、そこで研究をしようと思っているのでな。

そして今俺は、洋館の寝室にいる。とりあえず寝るためだ。

俺の部屋は大きさは30畳ほどで、壁、床、天井、家具にいたるまでが真っ白な部屋だ。家具はキングサイズのベッドと小さいフレンチチェストぐらいしか無い。この真っ白な部屋はどこかじいちゃん居た、神の間に似ている。此処を造ったのに特にこういう風に意識して造った訳じゃないのに何故か寝室だけ真っ白な世界になっていたのだ。

しかし、俺は白は嫌いな色ではない。むしろ好きな色で、それに心地が良い。

俺はさっさとベッドに寝ころがり、寝ようとした。

え？何だ？寝る必要ないだろ？確かにそうだが寝たいんだよ。そんな気分なんだよ。まあ、別にノンレム睡眠はできないのだがな。軽く体を休めたいのだよ（動きたくない。ダルイの意）。

「マスター、寝るのですか？」

「ん？ああ、うん、寝るよ12時間ぐらいさ」

「そうですかでしたら添い寝いたします」

……は？添い寝？スマフォが？

レイは、そういうと俺のポケットから独りで飛び出し、光に包まれた。

手のひらサイズの光の玉は、少しずつ大きくなり、そこから四本の何かが出てきて形を成していった。光が収まったときにレイが居た場所には黒いスマフォは無く。身長150cmぐらいの長髪の女の子が居た。

女の子は、中学2年ほどに見える容姿に、髪の毛は濡烏で見とれてしまう程きれいで、服装は真っ白な飾り気の無いシンプルな白いワンピースだが、着ている人が美人なので逆に似合すぎています。

てか、誰？

「レイディヴァリアですよ、マスター！！」

女の子がそう言いながら頬を膨らませている。怒っていると、主張してるのだからうがはつきり言って可愛いだだけだ。

って、レイ！？



「マジでレイなのか？」

「最高創造神様…、御爺様から言われていましたよね!？」

ん？そう言われてみれば…言われたような気がする。うん、言われたな。

「で、何で添い寝？」

「マスターが寝てしまったら私が一人ぼっちになるので…。ダメですか？」

グハッ!!

涙目上目遣いだと!？これはかなりきついぞ。って別に一緒に寝るの位いいんだけどさ気にしないし。そこ俺はロリコンじゃないぜ。

「いいぜ、一緒に寝ようぜ。起きたらこの町を…世界を散策するぞ」

「はい、マスター」

そして俺とレイは同じベットで眠りについた。(俺はサンダラス掛けたまままだ服装もそのままだぜ)

あれ？こんなでいいのか！？つかこれで終わり！？  
てか、レイ！いつの間にベビードールになってんだ！？下着まで

白かよ！？つてお前それ真ん中が切れているタイプだからパンツが  
！！少な目のフリルにシンプルなパンツがあ。つて観察するんじや  
ない俺！！目を、いや体をそむければ！！

ギヤアアアア胸がつ！！ちよっ！なんで抱きついて来るんだ  
！？…これはAじゃないB？Cは…まだ無いな。つて、だから観察  
するな俺えええええええええええええええええええええええ  
ええええええええええええええええええええええええええええ

明鏡止水だ俺ッ！！

「んっ、……マス……ター……」

「……………」

はあ、やれやれ。なんか娘ができたみたいだな。

俺は、レイと向かい合う形になり、頭をなでた。そして俺は意識を手放した…。

第一話 ……ん？原作キャラは？（後書き）

レイディヴァリア「すう、すう」

シン「ふう」

monokuro「なんだ？子持ちの父親の様な顔をして」

シン「なんでもいいだろ。こういう顔をした時だってあるんだよ」

mo「そんなもんか」

シン「それにしても作者、随分と遅い投稿だったな」

mo「えっ？結構早く投稿したつもりだけど…」

シン「遅えよ、一日一話ぐらいやれ」

mo「無理だから！！俺に【you逝っちゃいなよ】的なことをしろと…？」

シン「ああ」

mo「うわああああん」

レイ「ん、ん」

シン「五月蠅え！！エターナル！シン！フィィィィィバアアアアアアアアアア！！」



## 第二話 やつとかよ!?(前書き)

monokuro「やつとできたああああああ」

シン「随分と時間が掛かったな」

レイ「確かに、何かあったんですか?」

mo「ああ、ほかのやつ視点で書くの難しんだよ」

シン・レイ「…がんばれ」

mo「がんばるけどさ、原作キャラのせいで投稿遅くなるだろうな」

シン「まあ、とりあえず続けることに意味があるんだよ」

レイ「そうですね、続けることにあなたの存在理由があるんです」

mo「つまり、俺はこれを書かなければ存在理由はないと」

シン・レイ「」「」

mo「ひびく」

シン「とりあえず前書きはこれくらいにして」

レイ「本編をどうぞ」

mo「くくくくくくくく」

## 第二話 やつとかよ!?

シン

部屋が明るくなり始めた頃、俺は目を覚ました。

隣には添い寝していた、レイ（ベビードール装備）がいる。朝日を浴びたレイはとても幻想的な雰囲気を出し魅入ってしまう。って、俺はロリコンじゃない!!

俺はレイを起こさないようにベッドから出て、武家屋敷の厨房に向かった。もちろん朝食を作るためだ。色々作って食べてみたいって、思っていたからね。え？料理できんのかって？ふっふっふっふ、何を隠そう俺は、料理の達人だ!!

と、言っても冷蔵庫の中には何も無い。そりゃそうだ、昨日作ったばかりだからな。ついでにこの冷蔵庫は、中に入れたものを冷やすのもちろん、この中に入れた食材は時間が止まるから、生きた魚を入れて1ヶ月後に出しても、生きたままっていうことさ。

…まあ、簡単に言つとこの家にある家電はまともなのは一切無い



と思う。

俺は、朝食を作り始めた。使う獲物は特殊包丁肩落とし。…はつきり言って料理に使う包丁じゃあ無いんだろうなあ、これ。…でも使いやすいんだよな。

俺が作る朝食は

鮭の塩焼き（ちょっと辛口）

ご飯

味噌汁

漬物

と、いった和風な朝食だ。

早速俺は鮭や味噌、お米などを創造でだして、作り始める。まあ、材料を創造している時点で気づいている人間はいると思うが、創造で料理を出すことも可能だ。しかし俺はそれをしない。理由は簡単、さつきも言ったように俺は料理の達人だからだ。料理は作るから面白いのだ！美味しいって言ってもらえるのがいいのだ！

一人で食べるなら、料理を創造するけどね、一人分の、俺だけの料理を作るのはめんどくさいのだ。しかし、今はレイがいるのでな、料理を作るのだ。

そんなことを言っていると、廊下から足音が聞こえた。厨房と廊下をつなぐ扉を見るとそこには、今起きたであろう、片目をクシクシと、擦っているレイがいた。



「分かりましたあ」

そう言いながらレイは、洗面所へ向かっていった。さて、その間に仕上げますか。

俺はテーブルに朝食を並べ、座布団に座った。少しして顔を洗い着替えたレイも来て、朝食を取り始めた。

レイも初めて見る朝食を見てうずうずしているのが手に取るように分かる。

「あつ、レイ、食べる前にやること知っているか？」

「は、はい。御爺様からの知識の中に入っています」

「おkおk、それじゃあ」

「「いただきます」」

俺達は、朝食を食べ初めた。レイは口が小さいからか、少しずつ食べている。小動物の様な雰囲気なんともかわいらしい。

「レイ、これが食べ終わったらちよいと地下室で実験？していいか？この町の散策は午後からでいいか？」

「もぐもぐ、ごくん、はい、分かりました。」

可愛い可愛い可愛い可愛い！何、この子！俺を悶え殺す気！？律儀に食べ物飲み込んでから喋るって。いい！！

レイってこんなキャラだっけ！？おとなしくて大人な感じなやつじゃなかったっけ！？

朝食を食べ終えた俺達は、洋館の地下室に行き、実験をはじめることにした。

「あの、マスター」

「ん？なんだ？」

「いったい何の実験をするんですか？」

まあ、そりゃあ聞くか。何も言わずに実験を始めたらな。

「実験というか…、簡単に言うと封印だな」

「？封印ですか？」

「ああ、俺は力を使えるようにはなっただけどまだ制御が完璧じゃ無いんだよ。だから俺は制御するために修行するんだ。だけど、俺が普通に力の制御の修行を行ったら。この町…この世界が崩壊するんだ。だから力を封印して、被害を出さないように力を封印するんだ。」

「

「制御も完璧だと思っていました」

「ははっ、とりあえずこの不可視の枷の強化を行おうと思う」

「…確かその枷って一つでサタンを指先一つ動かせないほど封じることができましたよね？さらに強化するんですか！？」

「ああ、鎖一つで今の枷の効果にしようかと」

「！？何ですかそれ！？ありえませんか！？」

「だって、しょうがないじゃん。この封印でもこの世界を壊さないぎりぎりのところなんだから」

「初耳ですよそれ！？」

「うん、初めて言ったしね」

「…そうですね」

なんか、レイにあきれられた。何故？

「まあ、いいや。大体構想はできているのだが、それでも封印は完璧じゃないからさ、一応術式封印も使おうかと思う。術式封印は細かいのを沢山付けて必要に応じて解除できるタイプにする予定だ。まあ、術式封印はそもそも、封印具より力は弱いしな」

「ほんと、無茶苦茶ですね」

「しょうがないだろ、俺なんだから。んじゃ創り始めるか」

〈魔神製作中〉

枷を創る作業に入って2時間結構考えるのに時間が掛かった。やっぱり俺の力を封印するものは時間掛かるな。今の俺の力は、じいちゃんに創った上級神の一つ上ぐらいの力だ。ついでに枷は首にも付

けた（首の鎖はへそ辺りまである。これも伸縮自在）。

「これだけの封印具を付けていても上級神より上なんですな」

「まあな、後は術式封印をするだけだな。術式の形成は殆んどできているからさっさとできるな」

そついつと俺はさっさと作業を進めた。

結果俺は、下級天使級の力まで落とすことができた。ここまで落とすと力もコントロールしやすく、自分自身で力を下げたり隠したりできるようになった。

ついでに今は昼前、何とかギリギリで終わらせることができた。

昼飯は作らず外で散策しながら食べることにした。レイに行ったら、とても生き生きした目で「うん、いいよ」と、言われた。まあ、なんというか……。いゝゝねっ!!!

なんか俺最近壊れてきた様な気がするんだが。ついでにレイも。いやレイの場合これが普通なのかもしれないな、知識だけ入れられたロボットのようなもんだったからなあ。

というわけで、俺達は町を歩いています。美味しい飯にありつくためにツ！え？なに？情報収集とかするんじゃないのかって？んなもん飯の次の次の次だ！！

それから俺達の今の服装は、黒いジーンズに白地のインナー、それに前開きの黒い本皮製ストレイトジャケットを羽織ったシンプル

な格好だ。 シンプルじゃないだろ！？by作者

レイは、何故か黒いゴスロリ服。似合いすぎて鼻から愛があふれそう！

で、俺は食事どころを探しているんだが、何所がいいだろう？  
そんなことを思っていると目の前に喫茶店が見えてきた。ふむ、  
この店はなかなかいい店っぽいな。

「レイ、あそこの喫茶店でいいか？」

「はい、いいですよ」

レイの了解も得たので、俺たちは喫茶店に入った。喫茶店の名前は【翠屋】というらしい。

「いらっしやませ」

随分と美人な女性が出迎え、俺達を席へと案内した。

この店はどうも結構有名な喫茶店らしいので、客が入っている。

「ご注文はお決まりでしょうか」

「俺は日替わりランチを」

「私は、ナポリタンをください」



「かしこまりました。少々お待ちください」

そう言い女性は店の奥に行った。しばらくしたらトレイに注文した品を持ってきた。結構早いな。

感想。おいしかった。うんこれしかいえないな。

御持ち帰りように絶品らしいシュークリームを買い俺たちは、家に帰った。やっぱり、ほかの人が作ったものはいいな。それに店主とはなんだか気が合いそうだ。何にかは秘密だ。

「ところで、マスター」

「ん？何だ」

「あそこがこの物語の主人公の親のお店だって気づいて入ったんですか？最初に出迎えた人は高町 桃子さん主人公の実の母親です」

「へっ、そうだったの！？」

「それから世界の散策はどうしたんですか？」

「食事に満足して忘れていたあ！！」

まじで、すっかり忘れていた。はあ、鬱だ。

というわけで、散策することに。持ち帰ったシュークリームはあの冷蔵庫に入れたから問題ないだろう。

分かれて散策しようとしたが、レイが俺をサポートするのが私の役目ですとか何とか言って、一緒に行動することになった。でも、一緒に行動すると調べるのに時間が掛かるので俺は力を使うことにした。

使う力は、分身。分身は動物の姿にして、町中にばら撒くことにした。この分身が見たものは俺にもわかるという優れもの！

まあ、元々分身は結構作っていたんだよね。分身って俺の一部を使うわけだから分身することで俺の力を抑えることができるしな。

「まあ、町の散策は簡単にいうとただの散歩だな町の構造を知るためのな」

「確かにそうですね。私はマスターと一緒にならば何でもいいですから」

そんなレイの言葉にキュンキュンしながら俺は、町の散策を行っていた。町の構造を知るのももちろん、町に色々な仕掛けを行っていた。

ん？仕掛けが何か知りたい？はっはっはっは、それは教えられないな。まあ、少し教えるとしたら捕縛用結界とかな。

そんなことをしながら俺たちは、町を歩いていった。

途中、アイスが食べたいと思ったら、レイが買いに行きたいと申

したので財布から金（株で稼いだ）をレイに渡し、近くの公園で待っていることにした。

公園に入ろうとしたら、泣き声が聞こえた。声からして子供だろう。なんとなく気になって声の主を探した。まあ、簡単に見つかったな。

声の主は、ブランコに座りないでいた。子供は五歳もいっていないだろう。小さい子供だ。栗色の髪をピコピコ動きそうなツインテールにした、かわいらしい子供だ。…べ、別にロリコンじゃないんだからな。

俺は泣いている子供を放って置けるほどの魔神ではないので、その子のもとへ歩いていき泣き止ませることにした。いや、普通に登場しては面白くないな…、泣き止ませたいし、ちよいと不思議な登場の仕方でもするか。

なんかあの子、喫茶店の女性に似ているような気がするよな…、気のせいだな。

栗色の少女（高町　なのは）

私は、泣いていたの。お父さんが大怪我をして、みんなが忙しくなって、私に構ってくれなくなつたから。だから私はここで泣いていたのここにいれば誰かが迎えに来て構ってくれるから。

そう思っていたら…

「やあ、お嬢ちゃんこんにちは。どうしたんだい？こんなところでひとりで泣いて」

「に、にゃ？」

知らない男の人に声を掛けられたの。びっくりして変な声をだしてしまったの。

男の人はおにいちゃんと同じぐらいの身長かな？そんな人が、プランコの上から逆さまになって声をかけてきたの。そんな人を見ていたら涙が止まっていた。

「え、えと、だれですか？」

「俺かい？俺は小太郎だ風魔 小太郎。君は？」

「高町 なのはです」

私がそう名乗ると、男の人、小太郎さんはちょっと顔を引きつらせた。一瞬だけだったから、気のせいだと思うけど。

「ふむ、なのはちゃんはこんなところで何をしているんだい？お母さんは？」

「泣いていたの、お母さんはお仕事なの」

「ふむ、どうして泣いていたんだい？」

「お父さんが大怪我して、みんな忙しくなつて私を構ってくれなくなったから…、私はいらない子だつて思ったから」

私は、いらない子。だから構ってくれない。

「なるほど。しかし、一応言っておくけど、君はいらない子ではないよ？」

「ふえ？」

「親がわが子をいらないといいことはないからね、やっぱりそれだけ忙しいのだろうな」

小太郎さんの言葉は優しくかった。とてもとても心に響いたの。

「ところでなのはちゃん」

「はい？」

「お父さん、早く治ったら、家族が忙しく無くなってなのはちゃんに構って上げられると思うんだが、あっていると思うかい？」

「え、えと、わからないの。でも、お父さんには早く治ってもらいたい」

「ふむ、その願いかなえてやる」

「え？」

「明後日か明々後日にはお父さんは退院できると思っぞ」

「ほんとうですか!？」

「ああ、本当さ。俺は嘘をよく付くが、本当と言ったことは真実だ」

お父さんが治る。私の思いはそれでいっばいだ。

「そう言うことだ。今日はもう遅い。家に帰りなさい。そして明々後日、楽しみにしてな」

「はい」

小太郎さんの言葉を信じて、私は家に帰ることにした。でも、その前に聞きたいことがあった。

「また、会えますか？」

「いつかは会えるだろう。それは明日かもしれないし数年後かもしれない、しかし、絶対に会うことになるだろうな」

「そうですか」

私は、少し落ち込んだ。いつかは会える。でも、会えることには違いないけど…。

「ああ、でも桃子さんとは気が合いそうだし、翠屋のシュークリー  
ム美味しかったから、結構会えるかも知れんな」

「ふえ！？お母さんを知っているんですか？」

小太郎さんの口からいきなりお母さんの名前が出てきてびっくりした。お母さんの知り合いなのかな？

「昼に翠屋で昼食を取ったんだよ」

「ああ、なるほど」

「それから、もうそろそろ帰ったほうがいいと思うぞ」

「あつ、本当だ。バイバイ小太郎さん」

「おう、バイバイ。また会おう」

翠屋に来るならいつか会えるね。私はそう思いながら家路に着いた。

シン

やっべー、こんな俺のキャラじゃないよ！自分でやっていて気が持が悪い。しかも、まさかこんなところで物語の主人公とカミングアウトしでかすとは、驚きだ。

「お待たせしましたマスター。種類が沢山あって、迷ってしまいました」

なのはちゃんの姿が見えなくなってからレイが戻ってきたので、俺は主人公とカミングアウトしたことをレイに言った。

「マスターは、トラブルに巻き込まれる体質のような気がします」

「ああ、俺もそう思ってきた」

やはり、というか、あきれた。まあ、そんなもんだよね。



とりあえず俺は三日に一回の睡眠で動くことにしているのだ、ただまだ、散策するつもりだ。隣接する次元世界に行くのもいいな。

そんなことを考えていると、不意に背後から人の気配がした。実はとうとうこの気配、なのはちゃんが公園にいたときから在ったのだが、なのはちゃんがいなくなってから少し気配を大きくしているのだ。

しかし、この気配はずいぶんと小さいな。そう思いながら俺は後ろを振り返った。

そこにはずいぶんと可愛らしい、なのはちゃんと同い年位の子供が居た。腰まである茶髪に少し釣り上がった目が特徴の子供だ。

俺が見ているのを確認した子供は口を開き

「おい、お前転生者だな」

へっ？

## 第二話 やつとかよ!?(後書き)

mo「シンの前に現れた子供は何者か!今、運命の扉が開く」

シン「なにをやりたいんだ作者」

レイ「それにしてもオリキャラですか」

mo「ああ、原作キャラの視点が難しいからオリキャラ出すことにした」

シン「それってどうなんだよ」

レイ「アホですね」

mo「まあいい、無印が後何話で終わるかが問題なんだ」

シン「せめて20話ぐらいは続けるよ」

mo「マジで?」

レイ「普通はそれぐらいでいけると思いますが?」

mo「シンの力を使えば2話ぐらいで終われそうだから…」

シン「やるなよ?」

mo「あい、やりませんから上段に構えた形容しがたいボールのよ  
うなものを下ろしてください」

シン「たく、結構この世界気に入っているんだから、もうちょっと  
楽しませろよ」

レイ「そうですね」

mo「あいよ、それからシン」

シン「何だ？」

mo「レイにネコミミを付けたいのだが」

レイ「な!？」

シン「何言つてやがんだ馬鹿野郎!」

レイ「マスター、ありがと」レイにはウサミミだろ!」…ますた  
?」

mo「ふむ、ネコミミもなかなかいいと思ったのだが、確かにウサ  
ミミもありだな」

シン「だろ?それじゃウサミミ創造!」

シューウウウウウウウ

mo「なかなかいいウサミミだな」

シン「分かってるじゃないか」

レイ「え、ちよ、ますたあ？」

mo・シン「ふははははははは」

少女着せ替えられ中

レイ「ぴょん／＼／＼」

mo・シン「我ながらいい仕事をした」

レイ「うう／＼／＼ますたあが壊れてしまったのでこれで終わります。  
次回をお楽しみに」

シン「レイ、別に俺は壊れていないぞ？元々こんなんだ」

レイ「ふえっ！？」

mo「わかんなかったんだ…」

### 第三話 奴はッ！！（前書き）

mo「とても、難産でした」

シン（コタ）「ああ、確かに遅すぎだな」

レイ「まったくです」

mo「結構色々忙しかったんだよ」

コタ「寒くて、手が動かなかったんだろ」

レイ「どんな、家に住んでいるんですか？」

mo「家は普通の家だよ！！寒いのが嫌いなんだよ俺は！！」

コタ「それにしても俺の表記コタになっているな」

mo「ああ、本編でそういわれることが多くなると思ってや」

レイ「マスター、可愛いです」

コタ「な、なんか恥ずいな」

mo「まあ、そうだろうな」

コタ「つと、そんなことより本編本編」

レイ「マスターの前に現れた子供はいつたい！！」

mo「魔神異世界奮闘日記、魔法少女リリカルなのは無印!！」

コタ・レイ・mo「」はじまります!！」」

### 第三話 奴はッ！！

転生者 龍動流

りゅうどうながれ

突然だが俺は、転生者だ。

事故によって死んで、神様に転生させられた

そう、させられたのだ

事故の理由は、神様の書類ミス。なんともテンプレなことだ…。

俺としては転生などは必要ないと言ったのだが、神様が自分の気がすまないとのことで、好きな世界に転生させてあげるのと、特典もつけると言われたので、すぐに頭によぎったリリカルなのはの世

界に転生させて貰うことにした。

なぜ、リリカルなのはの世界かというと、ただ単純に彼女達を幸せにしたいからだ。

いや、恋愛的な幸せじゃ無い。不幸な人生などを変えたいのだ。

もちろんヒロインたちは美少女たちなので好きじゃないといえば嘘になる。けど、恋愛的なもの前に彼女らを不幸にしたいくないの一心だ。

そして俺は特典を貰い転生した。

特典は、自分で選んだ。初期設定で俺は主人公並みのステータス（なのはやフェイトやはやと同等に戦える）を貰っている、これで結構いけるんじゃないのかな？まあ、特典を選んでくれといわれたので、選んだ特典は

支配眼

様々な武器を使える能力（努力すれば達人並みになれる）

錬成能力（等価交換は質量のみ）

といった特典だ。

しかし、神様が転生の書類？を書きながら、なんだか、色々問題がある言葉を言っていたので、俺は、即刻キャンセルを申し入れようとした。



が、時すでに遅し。神様が、持っていた羽ペンを振るうと、俺の真下に真っ黒な穴（半径3m）が開き、俺は落ちていった。

俺は転生し、赤ん坊からスタートした。はつきりいつて授乳は恥辱だったがまあ、我慢した。しかし、我慢できないことは、俺の姿が…

男の娘なのだ…。

神様がブツブツ男の娘と、言いながら書類を書いていたので、もしやと思ったが…orz。

まあ、両親が色々喜んでいたのでいかと自己催眠を掛けながら生きてきた。てか母さん、俺は男だって言うのに何でフリフリのスカートを履かせようとするの！？え、可愛いから！？くっそおおおお！

生まれた土地は、予想通りというかなんというか、まあ、海鳴市だった。それから俺は自分の能力を確認したり、町を散策したりした。

リリなの主人公のなのはとは、家が隣ということから幼馴染だ。やっぱり可愛いんだよな、なのはって。でも、そういう目で見てると恭也さんに首をはねられそうだから見ていないけど…。

能力ははつきり言ってすぐに使えた。しかし、支配眼は、やはり漫画と同じように体を無理に動かしているということもあり、3秒間使用したまま走ったらそのまま倒れて動けなくなった。異常な疲労と激痛によって俺は意識を手放して、次に目が覚めたのは病院のベッドだった。あの時は両親にすごく心配掛けてしまったな…。

そして俺がこの世界に生まれてから数年がたった。俺は今、なのはを探している。理由は士郎さんが大怪我をしたからだ。まあ、あの事件だな。そのせいでは一人ぼっちになってしまおうと思って、無理をしてしまうようになってしまおうイベントだ。だから、俺は、なのはを励まそうということにしたのだ。やっぱり泣いていたら、とても悲しいからな。べ、別に好感度を上げようって訳じゃ無いんだからね。

公園にいるということしか分からないが海鳴市の公園を2つほど探したら、やっとなのはがいた。

公園のブランコに座っているのはは、とても悲しそうだ。すぐに駆け寄ろうとしたらいきなりブランコの上に拘束具のような服を着た男が現れた。突然、フィルムを途中で変えたように男は現れたのだ。これは、何らかの能力か？

男は、ブランコの上から蝙蝠のようにぶら下がりなのはと話していた。何を話しているのかは分からないが、男と話したのはは、泣いていた顔から、笑顔になったことから、励ましていたようだ。そしてなのはは泣き止むと、家に帰っていった。

原作にはあんな男はいなかった。つまりあの男は、イレギュラー、転生者だ。別に神は、転生者は俺だけとは言っていないし、転生用の書類があるぐらいだしな。

男はなのはを見送ると、なのはと別方向から女の子がやってきた、13歳ぐらいだろうか、とても可愛らしい女の子と話していた。男と話しているところを見ると男の知り合い…いや、同じ転生者だろう。話の内容は多分、なのはとの接触についてだろう。

男達が帰ろうとしたので、俺は男が公園から出る前に男と接触することにした。理由は男の目的を聞くためだ。この世界に転生したのだから何らかの理由があるはずだからな。

俺は男の後ろに出て行くと、男は振り返った。結構できるなこいつ。男が俺と目があつたのを確認して俺は男に問う。

「おい、お前転生者だな」

すると男は、面を食らったような顔をした。転生者って聞かれたのがそんなに驚くか？…ああ、自分だけだと思っていたのか。

男は、しばらく呆然としていたが、掛けていたサングラスをクイッとあげて、口を開いた。

「だったら、何だっただいお嬢ちゃん？」

なっ、こいつっ！言っではならないことを言いやがったな！！

「俺は男だ」H A H A H A H A H A、知ってるさ、こんなに可愛い子が女の子な訳がないからな!!」「っ!?!?」

何だ、こいつかなりのオタクか!?!?てか、一目で俺を男だと見破っただと!?!?すげえ!

って、感心している場合じゃ無い。

「で、転生者が何の用だい?」

「お前がこの世界に転生してきた目的を言え」

「転生してきた目的ねえ?何で?」

「俺の目的の障害になるかどうかを知るためだ」

そついうと男は突然クツクツと笑い出した。

「それは秘密、何故ならその方がかつこいいからだ!」

「な、何言っているんだお前」

「それにお前に俺の目的を言って、俺に何のメリットがあるんだ? まあ、どうしても知りたいなら俺と戦え、そしたら教えても良いぜ。俺が勝つたら、お前の目的と能力を教えてもらうぞ?」

なるほど、知りたいなら実力で示せってか！望むところだぜ、勝つて、目的を聞き出してやる！

「ああ、いいぜ！」

「よし、交渉成立？だ。行くぜ、お嬢ちゃん」

「だから、俺は男だ！！」

「俺は、普通の男や漢は嫌いだが、男の娘は好きだぜ。それはもうBLと言っても良い位にな」

「へ、変態だ！！お前は今後のこの世界のためにも此処で抹殺する！！！」

「そう、俺は今、蛹から蝶へと変体をするのだ！！ああ、それから模擬戦形式でやるから殺さないように。相手の致命傷になるところには寸止めで勝敗な、お前デバイス持っていないようだし非殺傷できないだろ？レイ、結界を展開してくれ」

「了解、マスター」

男が、少女に命令を出すと、辺りが変わった。結界か、此処でなら周りに被害を出さずに暴られるというわけか。にしても、マスター？てことはあの子はあいつのデバイスか！？2対1か、きついな。

「それから先に言っておくが、レイはこの戦いには参加しない、俺の武器はアームドデバイス一つだけ、能力は使わない。お前は存分に能力を発揮して良い。それと自己紹介がまだだったな、俺は風魔小太郎だ。4946」

「風魔！？しかも4946って古ッ！！細かいことは気にしない気にしない」…龍動 流、推して参る！！」

「開始の合図はこのコインが地面に付いたらな。んじゃ、行くぜ！！」

そして、俺と男、小太郎は向かい合った。小太郎との距離は5m程だ。俺は、コインが落ちる直前に支配眼を使い、コインが落ちると同時に相手に近づき、一瞬でけりをつける作戦だ。単純かつ速攻のこれはなかなかいいと思う。

小太郎はデバイスをセットアップしないうちに、コインを投げた。何故だ？セットアップしていたほうが、楽なはずだ。馬鹿なのか？馬鹿なんだな。顔が馬鹿っぽい？し。

コインが地面に落ちる直前に俺は支配眼を使い、世界がスローになった。これって発動してるだけでも頭に負担が掛かるんだよなあ。

え？コインが落ちる前に攻撃しろって？俺は正々堂々で勝負したいんだよ。ズルして勝っても気持ちが良い。そして、コインが落ちるのを確認した俺はすぐさま行動を起こそうとした。しかしできなかつた。理由は、コインが落ちると同時に小太郎が消えたからだ。

俺の支配眼は世界をスローで見ることが出来る。故に音速の物体ですら俺には見て、かわせる程だ。しかし、あいつは消えたのだ。転移魔法だったら、術式が展開されるはずだし、そもそも、支配眼を使っているから、そんな時間の掛かるものは見えないわけがない。てことは瞬間移動！？いや、だったら相手は俺ほど早くは動けないだろう。だったら見つけてたたけばいい！！

そう考えていると不意に後ろから気配がした。後ろに移動したのだろう。しかし、相手は俺並に動けない。だったら振り返って攻撃すれば俺の勝ちだ。

カチャリ

そんな音と共に、俺の後頭部に何か突きつけられる感覚があった。

「はい、しゅくりょ〜」

俺の後頭部に何かを突きつけている奴は支配眼を使っている俺に声を掛けてきた。支配眼を使っている俺に声を掛けただど！？てか声！？ありえないだろ！？どんだけ早口で言っただ！？何の能力なんだこいつは。

俺はすぐに後ろを振り向くと、ヘラヘラ笑いながら、BLACK CATにでてきた黒い裝飾銃【ハーデイス】にそっくりな銃を俺に向けた小太郎がいた。

「俺の勝ちだな。約束通り目的と能力を教えてもらっぞ」

「チツ、…分かったよ」

強い。こいつはかなりの実力だ。しかも何の能力かも分からなかった。速過ぎる。いったいどんな能力を神から貰っているんだ!?

「俺の能力はさっき見たから分かるだろうが、支配眼だ」

「それだけじゃないだろ？」

なんで、分かるんだ!?!あいつも何個も貰っているのか!?

「……錬成能力と様々な武器を使える能力だ」

「ふむ、んじゃ目的は？」

「なのは達に不幸な、つらい人生を歩んで欲しくないんだよ。だから俺はそれを防ぐ」

「なるほど、原作ブレイクって訳？」

「ああ、そっだ」

「ふ〜ん。それじゃ俺の目的は、世界を変えることだ。まあ、原作



ブレイクだな」

「なっ！？お前が勝つたのになんで目的を？」

「誰もお前が勝つたら教えるなんて言ってないぜ？俺は戦ったら教えてもいいぜって言ったんだぜ」

「なっ！」

…そういえばそうだ。って、そう思っていた俺って馬鹿なのか！？頭が固いのか！？

「ということ、俺はお前と敵対するつもりは無い。協力ならするがな」

「協力？」

「ああ、色々フォローしたり、情報提供したり、お前を鍛えたり、お前を助けたり、てな」

「お前、そんなに強いのか？」

「ああ、もちろんだとも！！何を隠そう俺は武術の達人だ！！そんなでもって、英雄であり戦士であり侍であり、自由気ままなお兄さん  
さ」

「自由気ままなお兄さんって」

「だから、呼び捨てるなよ？」

「ああ、分かったよコタさん」

「コタさんねえ、うん、なかなかいいな。あつ、それから初めに言うておくけど、俺の名前は風魔 小太郎じゃなくて、岩波 小太郎ね。……表では」

「表ではってなんだよ」

「普通に風魔なんて名乗れるわけ無いだろ？てか、ニンジャなんだしさあ」

「ああ、それもそうか」

「ちょっと考えれば確かにな。てか、本当に忍者かよ！？」

「ところで、世界を変えるってどういうことだ？」

「そのまんまの意味だが？原作とは違う話になればいいんだよ。まあ、お前や俺がここにいる時点で、とっくに世界は変わっているんだがな」

「てことは、目的は達成したのか？」

「んなわけ無いだろ。物語にそれなりに介入もするさ。お前もするのか？」

「あたりまえだろ」

さっきの目的を言ったときにそれは分かることだろ。

「ヒロインとはイチャイチャしないのか？」

「：したくないって言えば嘘になるが、その前に不幸にしたくない。それがどうしたんだ？」

「いや、まあ、なんだ。お前さあ、デバイスもっていないのに原作に介入するのか？」

「そうだが」

「だったら、ヒロインとイチャイチャしづらくなると思うんだが」

「なんでだ？」

「いや、単純にさ、能力を使って管理局に見つかれば、研究材料にされそうな気がするんだが：錬成とかどう説明できるのさ？」

：心当たりありすぎる！管理局の闇なんてものが俺の能力を見れば研究材料にされそうだ！！

「やれやれ。そこんところ全然考えていないんだな……………バカだなあ（ボソッ）」

「おい、今の最後のほう聞こえなかったが、馬鹿にされたのはよく分かったぜ」

無性に殴りたくなるやつだなこいつ。にしてもどうするか、デバイスが無くちゃ、原作介入できないな。

「というわけで、早速俺の出番だつて訳だ!!」

何でだ!?

「言つたろ?お前を助けるつて、というわけで、このデバイスをやるつ」

コタさんはそういつと持っていた装飾銃を俺に渡してきた。

「これ、お前のじゃ…」

「俺のデバイスはレイとこのサングラスだけだ。それは気まぐれで作ったものだから気にするな。それに俺にデバイスつて必要ないからな、格闘だけで結構いけるからな、基本魔法必要ないし」

格闘でつて、ドンだけだよ!?!しかも魔法を必要としないつて、

まあ、俺も魔法を使わずに戦えるがな。

そう言われ俺は銃を買った。銃は子供の俺が持つには大きすぎてまだ扱えそうに無いな。そう思いながら銃を見ると、銃は鈴の付いた赤いチョーカー（首輪）になった。

「このデバイスに名前は？」

「名前は無い。言つたる？気まぐれに作つたつてさ。それからそれはインテリジェントデバイスじゃない。簡易AI程度だ。つまり自動でパンツァーヒンダネスをやってくれるのだ。」

「パンツァーヒンダネスって事は、ベルカ式か」

「そゆこと。それから、それには基本の中距離拳銃型のゲヴェーアゲシュタルトの他に、近距離剣型のシュヴェーアトゲシュタルトに遠距離砲撃型のカノーネゲシュタルトと、あるから結構万能だぜ」

オールラウンダー用か、なかなかいいやつだな。にしても

「これってマジでコタさんが作つたのか？」

コタさんの能力は全然分からんな。デバイスを作る技術と頭脳に、あのスピード、さらに格闘までできるとは、かなり考えているやつだな。

「俺にできないことは無いからな、それから、そいつを使うにはせめて6歳位にならんと使えないぜ。ついでに俺は管理局入りはしないから、一応言っておくぜ？」

「なぜだ？物語に介入するには、管理局に入ったほうが…」

「いや、俺は管理局嫌いだし、管理局に入ったら自由気ままに動けないじゃないか。それに俺は管理局に入ったら確実に研究材料か、抹殺されるからな」

「なっ、抹殺！？お前どんな能力を持っているんだ！？」

「よく考えた能力さ」

コタさんはヘラヘラ笑いながらそう答えた。本当によく分からないやつだ。

「それから、6歳になるまでデバイスは使えないから、今から筋トレしておけよ。アームデバイスだからやっておいて損は無いからねえ」

「ああ、分かっている。それに俺はなのはの幼馴染なんだぜ？というわけで俺は、士郎さんに弟子入りすることができるからね」

「そういえばそうだな、すっかり忘れていたわ。ついでに俺も武術に関して教えることができるからね。まあ、体がそれなりにできてからじゃないと死ぬから教えられないがな」

「どんな、鍛え方をするつもりだよ!？」

「とんでもない鍛え方(笑)……………あれ?なんか忘れてるような」

そういうとコタさんは顎に手を当て唸り始めた。忘れる?それって…

「すみませんマスター。アイス溶けてしまいそうだったので全部食べてしまいました」

突然口を開いたレイさんはそんなことを言った。ああ、そういうえば俺とコタさんが戦ってる最中食べていたね。凄く美味しそうに。

「ん?ああ、レイそれは別にいいさ。美味しそうにアイスを食べるレイを見ただけで俺は満足だから。でもなんか忘れてる…、高町、たかまち、タカマチ…」

「土郎さんの怪我の事でしょうか?」

土郎さんの怪我?

「それだああああああああああああああああつ!!!」

「土郎さんの怪我って？」

「マスターは先ほどのなはさんと約束をしたそうなので、土郎さんが明後日か明々後日に退院できると」

「そんなことできんのか!？」

「いや、魔法を使えるんだぜ?それぐらいできて当然さ。というわけです。俺はすぐに土郎さんのところに行くから、お前が翠屋にいるときに俺も翠屋に行くから、何か分からないことや知りたいことがあったら俺に聞け、もしそのデバイスにAIを付けたいならそんなときな」

そう言い残しコタさんは、レイさんの手を握りまたしても消えた。本当に分からないやつだ。

その後、家に帰った俺は、帰りが遅かったので両親に怒られたのは別の話



### 第三話 奴はッ！！（後書き）

mo「書いてみて思った。ggggで展開早すぎだと、な」

レイ「無駄にかっこつけて言うセリフじゃありませんよね？」

シン「まあ、確かにな」

「流さんがオンラインしました」

流「うお！！此処何所だ！？」

コタ「よっ、遅かったな」

流「コタさん？いったい此処は…」

mo「此処は、あとがきの間、本編とはなんら関係ない、楽屋のよ  
うな場所だ」

レイ「そんな場所だったんですね」

コタ「俺も初めて知った」

mo「マジかよ！！…まあいい、コタ、やることは分かっているな  
」？」

コタ「ああ、しかと心得ている！！…」





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4142y/>

---

魔神異世界奮闘日記

2011年12月19日00時52分発行